

# 呼称語の機能と対人関係による使用制限

— 日中対照の視点から —

丁 尚 虎

## 要 旨

本稿では、インタビュー調査によるデータを用い、日中両言語における呼称語の機能と対人関係による使用制限について検討した。日中両言語の呼称語はともに呼びかける機能を持っているが、あいさつの機能に関しては中国語の呼称語のほうがより顕著である。対人関係による呼称語の使用制限について、上位者に対する使用制限を見ると、両親に対する使用制限は日中両言語ともに強いが、先生と上司に対する使用制限は両言語間で大きく異なっている。一方、下位者に対する使用制限を見ると、中国語より日本語の呼称語のほうが制限されている。また、見知らぬ人に対する使用制限について見ると、日本語と比べ、中国語の呼称語は近接化傾向が顕著である。

【キーワード：呼称語／機能／対人関係／使用制限】

## 1. はじめに

呼称語とは、相手に呼びかけるために使用する言語表現である。呼称語は談話標識として、丁寧度を調整する機能、対人関係の親疎距離を調整する機能を持っている。渡辺（1998：4）によると、呼称語は、自分と相手と、さらに周りの人との人間関係を見定めて使われなければならない。また、呼称語の機能と使用は言語文化によって多かれ少なかれ異なっている。たとえば、アメリカの大学院生が博士号を取得後しばらくすると、以前自分を指導していた教授でも名前だけで呼び捨てになるのに対し、日本では大学院生が博士号を取ったからといって恩師を呼び捨てにするということはまずあり得ない（鈴木1973；渡辺1998：9）。さらに、この文化による呼称語の使い方の差異は、外国語学習者の語用論的誤りと文化交流における異文化衝突と深くつながっている（西2012：231）。したがって、呼称語に関する対照研究は、外国語教育と異文化交流の促進に大きな役割を果たすと考えられる。

本稿で論じる呼称語は名称語と区別される。「彼女は先生である」における「先生」のような名称語はある人との社会的関係や役割を表すために用いられる。それに対して、「先生、時間になりましたよ」における「先生」のような呼称語は、直接人を呼ぶのに用いられる。人称詞における「あなた／君」のような対称詞にも呼称語としての機能があるが、本稿では対象外とする。本稿で論ずる呼称語は、「～さん」のような固有名詞、「先生」「お母さん」「部長」のような普通名詞および「～先生」「～部長」のような複合名詞の3つを含むものとする。これらの呼称語にはどのような機能があるのか、「上位者」、「下位者」、「見知らぬ人」という対人関係においてどのような使用制限があるのかについて、本稿では日中対照の視点から論じたい。

## 2. 先行研究

呼称語の機能を、佐々木（1998：62-64）は「個別化機能」、「上下機能」、「距離機能」の3種類に分類している。個別化機能に関する典型例として、名前や姓というような固有名詞が挙げられる。上下機能に関する例として、「先生」と「大佐」のような普通名詞および「～先生」と「～大佐」のような複合名詞は典型的である。距離機能は主に上が下に対して用いる略称あるいは愛称に現れる。また、吉仲（2015）は、小説の分析に基づいて呼称語の機能には「叙述の対象を指示する機能」もあると指摘している。しかし、それは呼称語ではなく、名称語としての機能であると考えられる。なお、言語文化によって程度が異なるだろうが、呼称語はあいさつとして使用されることもある。

日本語における対人関係による呼称語の使用制限について、鈴木（1973）によると、家族内で兄が弟を「おい弟」と呼べないのと同原理で、学校で先生は生徒を「おい生徒」と呼ぶことはできない。また、渡辺（1998：10-11）は、「私たち日本人には、下位の者が上位の者を呼称する場合、その名前を敬避し、代わりにその親族名称、職業名などなどを使って呼称しようとする規範意識が強く存在する」と述べている。

中国語における対人関係による呼称語の使用制限について、家族内で長幼関係または自分と相手の倫理関係をはっきり表そうとする場合、目下の親族を親族呼称で呼びかけることが可能である（陳2001：30）。また、目上の親族を呼ぶ場合、親族名称だけではなく、愛称や名前で呼びかけることもある（王2009：127）。しかし、学校と会社の上位者・下位者を呼ぶ場合における中国語の呼称語にどのような使用制限があるのかについては、先行研究ではほぼ言及されていない。

上述の先行研究から、対人関係による呼称語の使用は、上位者、下位者に対してはある程度制約されていることが分かる。また、親族呼称の使用については、言語文化によって異なることが分かる。しかし、親族関係以外の上位者・下位者による使用制限の研究を見ると、中国語についてはまだ大きな研究の余地がある。また、中国語の呼称語の対人関係による使用制限に関する原因分析が十分だとは言い難い。さらに、何かのきっかけで見知らぬ人に呼びかけなければならない場合、日中両言語の間にどのような差異があるのかについての対照研究も見られない。本稿では、以上の先行研究の問題点を踏まえて、呼称語の機能、「上位者」、「下位者」、「見知らぬ人」という対人関係における呼称語の使用制限について、日中対照の視点から考察する。

## 3. 研究方法

日中の呼称語の機能を検討するため、C J C S（中日対訳コーパス）や先行研究における日本語と中国語の例文を用いた。また、呼称語の対人関係による使用制限を明らかにするため、半構造化インタビュー調査を行った。本稿では、呼称語の対人関係による使用制限に重点を置くため、半構造化インタビュー調査の詳細について詳しく説明する。

社会人における呼称語の実態を調べるため、2015年6月25日～7月28日の間に日本語母語話者と中国語母語話者各10名に対して半構造化インタビュー調査を実施した（録音時間：計3時間54分16秒）。記録手段はICレコーダで、録音した内容を書き起こしてデータに整理した。インタビュー

調査では、日本の大学や企業に勤めている日本語母語話者10名と中国の大学や企業に勤めている中国語母語話者10名を対象に、それぞれ日本語と中国語で以下のA～Cの質問をした。

- A：「先生」、「課長」、「田中さん」、「お父ちゃん」のような呼称語のみを出会いのあいさつとして用いることは可能だと思うか。（親しい人に対してはどうか）
- B：知り合いの範囲で、上位者には名前で呼びかけたことがあるか。下位者に対して、「息子」、「娘」、「姪」、「甥」、「後輩」、「部下」などのような呼び方で呼びかけたことはあるか。なければ、どのように呼びかけるべきか。
- C：見知らぬ人に対して呼びかけなければならない場合、10代後半～20代の若者に対して「お兄さん」や「お姉さん」のような呼び方で呼びかけたことがあるか。なければ、どのように呼びかけるべきか。

インタビュー対象者は主に日本の仙台市に在住している中国語ができない日本語母語話者と中国の南昌市に在住している日本語ができない中国語母語話者から任意に選出した成人（30代～60代）である。インタビュー対象者の属性については、以下の表1に示す。

表1 インタビュー対象者属性表

性別 \ 母語別	日本語母語話者	中国語母語話者	合計
男性	5	5	10
女性	5	5	10
合計	10	10	20

本稿では、インタビュー調査対象者を以下のような略称で示す。

日本人男性：J M（01～05）； 中国人男性：C M（01～05）

日本人女性：J W（06～10）； 中国人女性：C W（06～10）

#### 4. 呼称語の機能

呼称語の機能について、佐々木（1998：62-64）は、「個別化機能」、「上下機能」、「距離機能」の3種類があると指摘しているが、呼びかける機能が三者の共通点であるため、この三者に共通する機能を「呼びかけの機能」と呼ぶことにする。また、言語文化によっても異なるが、呼称語をあいさつとして使用することがあるため、「あいさつの機能」も呼称語の重要な機能の1つであると考えられる。つまり、呼称語の機能には基本的に呼びかける機能とあいさつの機能という2つがあるということになる。

#### 4.1 呼びかける機能

日本語にせよ中国語にせよ、呼称語の機能の1つは相手にこちらへ注意を向けさせることである。以下の(1)と(4)における「高橋さん」と「小王」は固有名詞、(2)と(5)における「先生」と「總經理」は普通名詞、(3)と(6)における「風間先生」と「張老師」は複合名詞である。つまり、日中両言語において、呼称語としての固有名詞、普通名詞、複合名詞はともに呼びかける機能を持っている。

- (1) おい高橋さん、頭も顔も埃だらけだぞ。灰の髪を被っておるようだ。

——『黒い雨』(227)

- (2) またお出でなさいよ、先生。 ——『あした来る人』(4930)

- (3) 風間先生、笹屋の亭主が御目に懸りたいと言って、先刻から来て待っておりやす。

——『破戒』(156)

- (4) 小王，你的房间收拾得很好，多么舒服。你的家庭经济情况很好吗？

(日本語訳：燕、きみの部屋は、なんて清潔で、居心地がよいんだろう。きみの家は、よほど裕福なんだね) ——『青春の歌』(4148)

- (5) 總經理，咖啡三明治预备好了。

(日本語訳：社長、コーヒーとサンドイッチのご用意ができましたが)

——『上海の朝』(上巻第I部)(126)

- (6) 張老師啊，您说何苦？每天一折腾就是半宿，闹这么个下场，还不长长记性儿，还写个什么劲儿！

(日本語訳：張先生、あなたも大変ねえ、毎晩遅くまで書いていらっしゃるけど、こんなことになってしまっ……でも、まだ懲りずに書き続ける気なの?)

——『轆轤把胡同九号』(186)

上述したこの「呼びかける機能」について、日本語と中国語の間には違いは存在するのだろうか。後の第5章では、「上位者」、「下位者」、「見知らぬ人」を対象として詳しく紹介する。

#### 4.2 あいさつの機能

あいさつの機能とは、呼称語のあいさつとしての働きである。呼びかける機能においては、日本語と中国語の両言語における呼称語の用法は一致しているが、あいさつの機能においては、かなり大きな違いを示している。中国語の呼称語は相手への敬意を示す手段として積極的に使用され、それ自体でもあいさつとして機能するのに対して、日本語の呼称語は単体でのあいさつとしての機能がない(西2012)。具体的な例として、西(2012)は以下の(7)を挙げている。

(7) 学生：曲老師。(学生：曲先生。)

老師：你好。(先生：こんにちは。)

(7)において、「曲老師」という呼称語はあいさつとして使用されているが、「曲老師好(曲先生、こんにちは)」あるいは「曲老師、您好(曲先生、こんにちは)」にしても自然である。しかし、「曲老師」というような呼称語を省くと、どのような丁寧な言葉であいさつしても失礼になる。学生が目上の先生に対して「你好(こんにちは)」とだけあいさつするのは不自然であり、「你好」を使用するにしても、通常その前または後ろに「～老師(～先生)」のような呼称語が必要である(曲他1999,2001;西2012)。水野(1998:54)は以下のような例を挙げている。

日本で学習、研究活動をしている中国人留学生が大きな食堂の向こうの端から大きな声で「先生！先生！」と呼ぶので「はい、何ですか？」と立ち止まって待っていたら、近づいてきて「おはようございます！」と言われて気が抜けた。

朝から何度も顔を合わせている留学生が、会うたびに「先生。」「先生。」と言う。これらの言語活動は、彼らの価値観では当然の礼儀であって、今までは言わずにはすまされないものであった。

水野(1998)は、現代中国では、敬意の表現は日本語のように体系的な敬語法としてではなく、呼称の問題に大きな比重が置かれていて、呼称は現代中国語のあいさつでの地位は日本語のあいさつでの地位より重要であると指摘している。つまり、中国語では、上位者に対してあいさつする場合、適切な呼称語は欠かせない要素であると推測できる。

それに対して、日本語では、呼称語のあいさつの機能はそれほど顕著ではない。(8)のような例においては、「高橋先生」という呼称語は必須の要素ではない。先生に対してあいさつする場合、呼称語をつけてもつけなくても差支えない。

(8) 学生：(高橋先生)、おはようございます。

先生：おはよう。

(作例)

他方、普通の場合、あいさつ表現としての「おはようございます」は省略できない。省略すると失礼になるためである。以下のJM2がその例である。以下のJM2、JW1、JW2の例は「日本語の呼称語だけであいさつすることが可能だと思うか」という質問について10名の日本語母語話者に行ったインタビュー調査の結果から抜粋した例(一部省略)である。

JM2：日本では「先生、こんにちは」と言うけど。「先生、こんにちは」と言わないことはない。ちょっと目上の人に対しては、やっぱり、「こんにちは」は省けない。

ただし、非言語行動を伴わせれば、日本語でも呼称語だけであいさつすることも可能であるという意見もある。以下のJ W 1とJ W 2からそれが窺える。

J W 1：日本人の学生はよく言う。「～先生」と言って、そのまま行っちゃうとか。顔と表情が分かるから。あいさつしているなっていう言葉…「～先生」って言った時にも顔がにっことしてれば、ああ、あいさつしてくれたんだなと思うから…あいさつであるかどうかその場によるんじゃないですか。どういう場面で呼ばれるかによるんじゃないですか。教室とかで「～先生」と言われたらなんか用事があるかなと思うんですけど、廊下とかで…

J W 2：…言わないっていうことは日本のポライトネスですね。ですから、「先生」って、お辞儀しながらだったら、十分なあいさつだと思うので…

つまり、中国語においては、呼称語をあいさつとして使用する機能が極めて顕著であるのに対し、日本語においては、呼称語のみでのあいさつは、非言語行動とセットになるとある程度許容されるといえるだろう。

## 5. 呼称語の対人関係による使用制限

呼称は、呼ぶ人が呼ぶ相手との関係をどうとらえているかで決まり（渡辺1998：4）、人間関係の距離感を敏感に反映する（滝浦2008）。上下関係においては、上位者に使用する呼称語は下位者と同等者に対して必ずしも使用しなければならないわけではない。また、下位者と同等者に使用する呼称語は上位者に対して必ずしも使用できないわけではない。親疎関係においては、ウチの人使用する呼称語はソトの人には必ずしも使用できない。また、ソトの人使用する呼称語はウチの人には場合によって必ずしも使用する必要がない。呼称語のこのような対人関係による使用制限は言語文化によって異なることがある。本節では、日本語母語話者と中国語母語話者各10名に対して行ったインタビューによる結果に基づいて、対人関係による呼称語の使用制限に関する日中異同及びその原因を明らかにする。

### 5.1 上位者に対する使用制限

日本語における呼称語の使用について、渡辺（1998：9）は、大学の中には、恩師を「先生」と呼ばずに、「さん」で呼ぶ人も結構いるらしいと指摘しているが、滝浦（2008）は上位者に対して名前で呼ぶことはできないと主張している。

上位者（先生、上司、両親）に対して、名前（「～さん」）で呼びかけることが可能であるかどうかについて、日本語母語話者と中国語母語話者各10名に対してインタビューを行った。その結果、日本語では、上位者に対して必ずしも名前で呼ぶことができないわけではないと分かった。両親に

対しては名前で呼ぶことはできないが、学生から学校の先生に、部下から会社の上司に対しては、場面によって使用することもある。

J W 1 : そういうふうに呼んでくださいという先生がいる。私を先生と呼ばないで、「鈴木さん」と呼んでくださいって。だから、学生も「鈴木さん」と呼んでいる。

J M 4 : それは場合による。普通はあまりしない。だけど、例えば、「～先生」だとか、「～教授」だとか、そういうふうなことを使えないふうな了解のもとに話を進めるということがあるから。つまりその目上、目下ということを考えないで行こうとか、そういう場面では、「さん」とか、全部それで統一するというふうにわざわざ言うけど。

J M 5 : 会社に関していうと、その会社がどんな文化を持っているかによって変わるので、一概に会社だから言えないとか言えるとか言えないし、さらに言うと、一つの会社の中でも、あのセクションによって違うし、その上司がどんな人か、人間性みたいな雰囲気もあると思うので、一概には言えない。

上述の J W 1、J W 4 から分かるように、大学の中で、先生の了解のもとに話を進める場合、学生が先生を「(～)先生」と呼ばずに、「～さん」で呼びかけることが可能である。これは、渡辺(1989: 9)の観点とほぼ一致する。J M 5 の発言から分かるように、会社の中で、部下が上位者を「～さん」で呼べるかどうかは職場の人間関係次第である。

それに対して、中国語では、先生、上司、両親に関わらず、相手が上位者であれば、普通の場合、名前で呼ぶことができない。以下の C W 1、C M 3 と C M 5 がその意見である。

C W 1 : 我会用美国老师和美国上司的名字来称呼他们，但是对中国老师和中国上司我从来没有那样叫过。对自己的父母一直都是叫“爸爸”“妈妈”或者“老爸”“老妈”。小时候和兄弟姐妹吵架赌气的时候会叫他们的名字。

(アメリカ人の先生とアメリカ人の上司をよく相手の名前で呼んでいるが、中国人の先生と中国人の上司をそういうふうと呼んだことが全然ない。自分の両親にもずっと「お父さん／ちゃん」「お母さん／ちゃん」で呼んでいる。子供時代大変怒ってしまって、喧嘩する場合お姉さんに対してたまたま名前で呼んだことがあるが)

C M 3 : 我觉得在中国是不可以叫自己父母的名字的。在我的记忆当中，学生阶段对老师还有工作以后对上司，我从来没有用名字来称呼过他们。而且也没有听过有人这么称呼。

(中国では、両親を名前で呼ぶことは許されていないんじゃないかと思う。僕の記憶では、学生時代の先生と今までずっと働いている会社の上司を名前で呼んだことは全然ない。そして、聞いたこともない)

CM5：在私人场合，如果对方是非常好的朋友的话，即使对方是我的上司我偶尔也会叫他的名字。  
但是一般情况下我不会那么叫。作为学生对自己的老师，作为孩子对自己的爸妈，在我的记忆里我从来没有那么叫过。

（個人的な場面で、相手が非常に親しい親友である場合、自分の上司であっても、たまたま名前で呼ぶことがあるが、普通の場合、そういうふうには呼ばない。学生として、学校の先生に、子供として自分の両親に対して、名前で呼んだ記憶は全然ない）

以上のCW1、CM3、CM5から、通常、中国では両親を名前で呼ぶことが許されないのは言うまでもなく、学校の先生と会社の上司を名前で呼ぶことも許されないことが分かる。この点については王（2009：127）の見解と異なっている。

つまり、日中両言語の呼称語は、親族関係では共通の傾向を示しているが、学校の師弟関係と会社の上下関係では、大きな違いを示している。

呼称語の親族関係による使用制限について、なぜ日中両言語が一致しているのか。これは日中両国がともに実名敬避俗の影響を受けているためであると考えられる。実名敬避俗とは、貴人や親などに呼びかける場合、実名を避ける風習である。中国の避諱の例が有名だが、日本を含む世界各地で同様の風習が見られるともいわれる。穂積（1926）によると、日本では中国の諱の礼制が導入される以前から、実名を避ける習慣が存在した。

渡辺（1998：11）によると、呼称の使用について日本人に名前の敬避の規範意識がある。これについて、高梨（1981）、豊田（1988）も言及している。この実名敬避俗の影響のもとで、親に対して尊敬する呼び方で呼ぶのは礼儀正しく、名前で呼ぶのは忌むべきことであると言われている。現代の日本と中国の社会では、この実名敬避俗からの影響は昔と比べて弱くなってきているが、実名敬避の意識は現在も根強く残っている。

しかし、学校の先生と会社の上司を名前で呼ぶことができるかどうかについて、日中両言語の呼称語は大きな違いを示している。上記のJW1、JW4、JM5、CW1、CM3、CM5の発言から見れば、日本語と比べて、中国語の呼称語の対人関係による使用制限はより強いと言えるだろう。これは西洋文化を吸収する程度にかかわると考えられる。明治維新まで「和魂漢才」という文化吸収の方針をとっていた日本は、その後「和魂洋才」という方針に変更することになった。さらに第二次世界大戦後、「和洋折衷」が日本の外来文化を吸収する方針になった。即ち物質と技術の面だけではなく、精神的な面でも吸収し始めるようになった。民主主義、平等意識などは日本国民に受けられるようになっていった。現代の日本社会では、上述のJW1、JW4、JM5が示している通り、場面によって上位者に対して名前で呼ぶことが可能になってきたのは平等意識の表れの1つではないかと考えられる。それに対して、近代の中国は鎖国の政策を破って、技術の面で西洋に学び始めるようになったが、精神の面では依然として伝統的な価値観が主である。現代の中国社会では、平等意識は昔よりその影響が大きくなってきたが、それが浸透するまでは時間がかかるだろう。上位者に対して、個人的な場面でもあまり名前で呼ぶことがないということは、その表れで



はないかと考えられる。

## 5.2 下位者に対する使用制限

中国語では目下の親族にも親族呼称を持っているが、日本語では目下の親族には親族呼称を持っていない(陳2001:30)。鈴木(1973)の観点と同じように、滝浦(2008)は、日本語の親族呼称では、「弟ちゃん」「ねえ、娘」「孫！」などのような自分より下であることを意味する語は用いられないと指摘している。というのは、親族名詞や地位・職業名詞での呼称は、その人を呼んでいるのではなく、その人に付与された役割を呼んでいるのに対して、名前で相手を呼ぶ場合は相手が対等か目下の時であるためである(滝浦2008)。中国語の親族呼称では、下位者の親族に対して「弟・妹」「息子・娘」「甥・姪」のような呼称語が使用できるだろうか。これについても、上述の半構造化インタビュー調査において、10名の中国人被調査者に対してインタビューを行った。その結果は、上述の陳(2001)と滝浦(2008)の主張と基本的に一致している。即ち、日本社会では、親族呼称で下位者を呼ぶことは減多にないが、中国社会では、親族呼称で下位者を呼ぶことは多く存在している。以下のCW2とCM4がその意見である。

CW2：以前在中国用亲属名词来称呼比自己年幼的亲属很常见。最近用名字来称呼的现象虽然有所增加，但是用亲属名词来称呼的人仍有很多。不过称呼侄子和侄女的时候大多数还叫用对方的名字。

(下位者を親族呼称で呼ぶことは昔の中国では多かった。最近名前で呼ぶことが増えてきたが、親族呼称で呼ぶことが依然として少なくない。ただし、「甥・姪」という呼称の代わりに名前あるいはニックネームで呼ぶことの方が大多数である)

CM4：我没有被那样叫过，但是经常能听到我周围的人那样被叫。特别是在方言中，用亲属名词来称呼比自己年幼的人很常见。

(自分自身はそういうふうに呼ばれたことが減多にないが、周りの人がそういうふう  
に呼ばれるのをしょっちゅう聞く。特に方言の中で、下位者の親族呼称がよく使われているみたいだ)

下位者に対するこの呼称上の日中差異は「親しくなるためのストラテジー」における日中差異によるものであると考えられる。日本では、人間関係の違いは主に言葉遣い(敬語と丁寧表現の有無)に現れるが、中国ではその敬語と丁寧表現のシステムがないため、呼称語を利用しなければならない。呼称語はどの語を用いるかにより、相手との社会的関係を明確にすると共に、敬語表現の乏しい中国語において、上位者に対して敬意を示すだけでなく、下位者に対して親しさを示すための重要な語用論的要素である(西2012:247)。日本語では、名前の後に「さん」、「ちゃん」、「君」などをつけることによって、人間関係の距離を調節することができる。ところが、中国語では、「さん」、

「ちゃん」、「君」に当たる表現がない。親族の下位者に対して親しさを示すため、名前より、親族呼称語を用いることは重要な選択肢の1つではないかと考えられる。

### 5.3 見知らぬ人に対する使用制限

呼称は遠隔化と近接化という2つの方向性を持っているため、対人関係について何らかのニュアンスを伝えている（滝浦2008）。見知らぬ人に対しての呼称には遠隔化呼称語と近接化呼称語という2つが存在すると思われる。「あのう」、「すみません」、「ちょっと」などを用いて呼ぶことは遠隔化的呼称語であり、「お姉さん」、「お兄さん」、「おばあさん」、「おじいさん」、「お母さん」、「お父さん」のような親族呼称語は見知らぬ人に用いることは近接化呼称語であると考えられる。日本語では、遠隔化呼称語が頻繁に使われているのに対して、中国語では、近接化呼称語が盛んに使用されている。表2が示しているのは、「何かのきっかけで以下の見知らぬ人に対して呼びかけなければならない場合、どのように呼ぶか」についてのインタビュー調査の結果である。

表2から見る限りにおいては、日本では、親族類の呼称語で見知らぬ人を呼ぶことはほとんどない。それに対して、中国では、親族類の呼称語の使用率が高いにとどまらず、表現の豊かさが顕著であることも見られる。ただし、見知らぬ人に対して親族類の呼称語が使用できないかという疑問に対して、以下のJW1、JW4とJW5のような意見は被調査者の半数以上によって指摘されている。

表2 見知らぬ人に対する使用制限の対照

見知らぬ人	日本人 (10)	中国人 (10)
20代前後	「すみません」類 (7); 「その他」 (3)	「你好 (こんにちは)」 (2);「美女 (美人) / 帅哥 (イケメン)」 (5);「兄弟」類 (3)
50代前後	「すみません」類 (10)	「叔叔/阿姨(おじさん/おばさん)」 (8);「你好(こんにちは)」 (1);「请问 (あのう、すみません)」 (1)
80代前後	「すみません」類 (9); 「おばあさん/おじいさん」 (1)	「大爷/大妈(娘) (おじいさん/おかあさん)」 (9);「请问 (あのう、すみません)」 (1)

(注：括弧内は人数)

JW1：お店の人はなんか「お兄さん」とか、「お姉さん」とか、「奥さん」とか、「ご主人」とか。お店の人、特別いいじゃないか。

JW4：八百屋さんとかで言っているけど…

JW5：レストランであれば、「お兄さん」「お姉さん、ちょっと来てください」というふうなのはあると思う…

つまり、日本では、親族類の呼称語の使用は商業的な場面で見られるものである。商売で使用する

ることは許されるが、一般的な場面では滅多に使用されていない。それに対して、中国では、親族類の呼称語は汎用されているといえるだろう。なぜそういう現象が見られるかという、対人関係における「ウチ・ソト・ヨソ」に対する意識の強さと深くかかわっていると考えられる。三宅（1993）による図1が示しているように日本では、「ウチ・ソト・ヨソ」に対する意識が極めて強い。即ち、ヨソの他人は容易にソトとウチの範囲に入れない。他人に対する親族類呼称語の不使用はこのヨソ意識の強さの表れであると考えられる。また、商売での例外的な親族呼称語の使用は、商売の人が自分の商売を拡大させるため、または客がサービス係の人によりよいサービスを求めるため相手との心理距離を短縮する手段であると思われる。これらの場合、親族呼称語の使用は、話し手が聞き手のソトとウチの範囲に入るわけではなく、ある特定の目的を達成するため臨時的な親しさを示すのである。

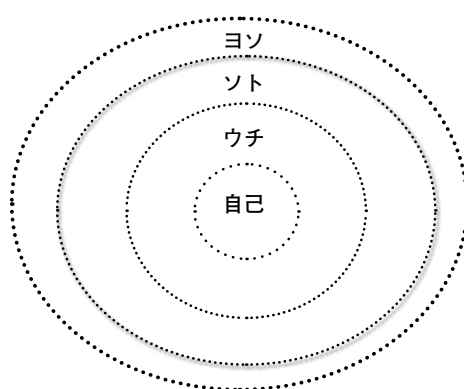


図1 日本人のウチ・ソト・ヨソモデル（三宅 1993）

それに対して、中国社会では、「ウチ・ソト・ヨソ」という意識はそれほど強くない。以下の図2は、三宅（1993）が描いた日本人のウチ・ソト・ヨソモデルを参考にし、筆者が作成したものである。図2が示しているように、図1におけるヨソとソト、ソトとウチの間の線を点線で示せば中国人の対人関係に対する意識をよく表すことができると考えられる。ヨソの他人が容易にソトの範疇に入れるだけでなく、外の人がウチに入ることも難しくない。親族類の呼称語の汎用は中国人の対人関係意識の表れの1つではないかと推察できる。

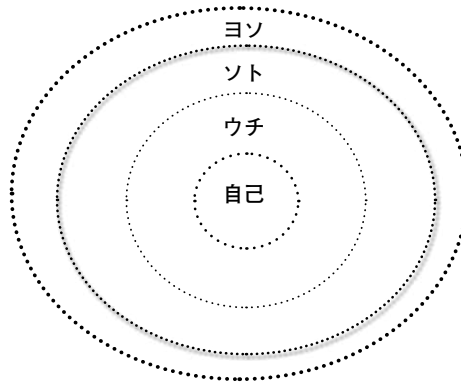


図2 中国人のウチ・ソト・ヨソモデル

## 6. まとめ

以上、日中両言語における呼称語の機能および対人関係による使用制限の特徴を考察した。日中両言語はともに呼びかける機能を持っているが、あいさつの機能について、日本語と比べると中国語の呼称語のほうがより顕著である。上位者に対する使用制限を見ると、日中両言語は両親に対する使用制限がともに強いが、先生と上司に対する使用制限について、大きく異なっている。日本語より中国語の呼称語の使用制限が強いのは、西洋文化を吸収する程度の違いによるものであると推察できる。下位者に対する使用制限を見ると、中国語より日本語の呼称語のほうが制限されている。これは「親しくなるための戦略」の違いに深くかかわっていると考えられる。見知らぬ人に対する使用制限において、日本語と比べてみると、中国語の呼称語は近接化傾向が顕著である。これは、日中両国における対人関係の基本構造の違いによると推察できる。

人称詞を用いた呼称語や同等者に対する呼称語の機能と対人関係による使用制限に関する日中対照研究を行う必要もあると思われるが、今後の課題にしたい。

\* 本稿は、2015年8月20日に上海外国語大学にて行われた第七回中日対照言語学シンポジウムにおいて発表した原稿に加筆訂正を加えたものである。

## 参考文献

- 王冠華（2009）「中日大学生父母称呼的对比」『日語学習と研究』4（143）対外経済貿易大学, pp. 120-127
- 曲衛国・陳流芳（1999）「礼貌称呼的语用学解释」『華東師範大学学报（哲学社会科学版）』6 華東師範大学, pp. 118-124
- 曲衛国・陳流芳（2001）「汉语招呼分析」『華東師範大学学报（哲学社会科学版）』3 華東師範大学, pp. 116-124
- 佐々木倫子（1998）「英語の呼びかけ—名前・略称・愛称—（特集人の呼び方）」『日本語学』17（9）明治書院, pp. 60-65
- 鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書
- 高梨公之（1981）『名前のはなし』東京書籍
- 滝浦真人（2008）『ボライトネス入門』研究社
- 千野栄一・野元菊雄・寿岳章子・武部良明他（1978）『岩波講座日本語3 国語国字問題』岩波書店
- 陳 露（2001）「現代日中両言語における親族呼称の対照研究」『千葉大学社会文化科学研究』（5）千葉大学, pp. 21-31
- 豊田国夫（1988）『名前の禁忌習俗』講談社
- 西 香織（2012）「中国語の呼びかけ語の語用論的機能について—出会いのあいさつを中心に—」『中国語教育（10）』中国語教育学会, pp. 231-250
- 穂積陳重（1926）『実名敬避俗研究』帝国学士院
- 水野マチ子（1998）「敬意の表現の行方—「同志」は今？—」『日本語学』（8）明治書院, pp. 54-59
- 三宅和子（1993）「日本人の言語行動とウチ・ソト・ヨソの概念（言語編）」『日本語教育方法研究会誌』日本語教育方法研究会, pp. 6-7
- 吉仲聖沙（2015）「小説における呼称語の分類とその表現性」『日本言語文化研究（19）』日本言語文化研究会, pp. 38-56
- 渡辺友左（1998）「『呼称』という論点」『日本語学』17（9）明治書院, pp. 4-11